宮下（みやした）遺跡

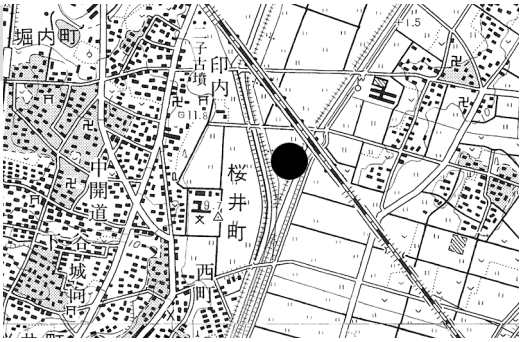
所　在　地　安城市桜井町小社
（北緯34度55分30秒 東経137度6分1秒）

調査理由　交付金事業（鹿乗川）

調査期間　平成23年9月

調査面積　80㎡

担　当　者　松田 訓・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は、鹿乗川改修工事にかかる事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。当該遺跡は、これまでに安城市教育委員会によって数次の発掘調査がなされているが、今回の調査区はそこから東方へ約300mの地点にある。

立地と環境　遺跡は、碧海台地東縁下を南北に流れる鹿乗川流域の沖積地上に立地する。鹿乗東川と鹿乗西川の合流地点に位置し、西方の台地上には式内社である桜井神社が所在する。周辺沖積地上は、ほぼ全域が遺跡群として認識されており、弥生時代末期～古墳時代初頭に最盛期となる集落遺跡が多数存在する。

調査の概要　調査区は、鹿乗東川堤防に沿った南北に細長いトレンチ状である。地層は耕作土直下に耕地整理時の造成土、それ以前の耕作土および畦畔があり、その下で遺構面となる。深さは約0.8mである。

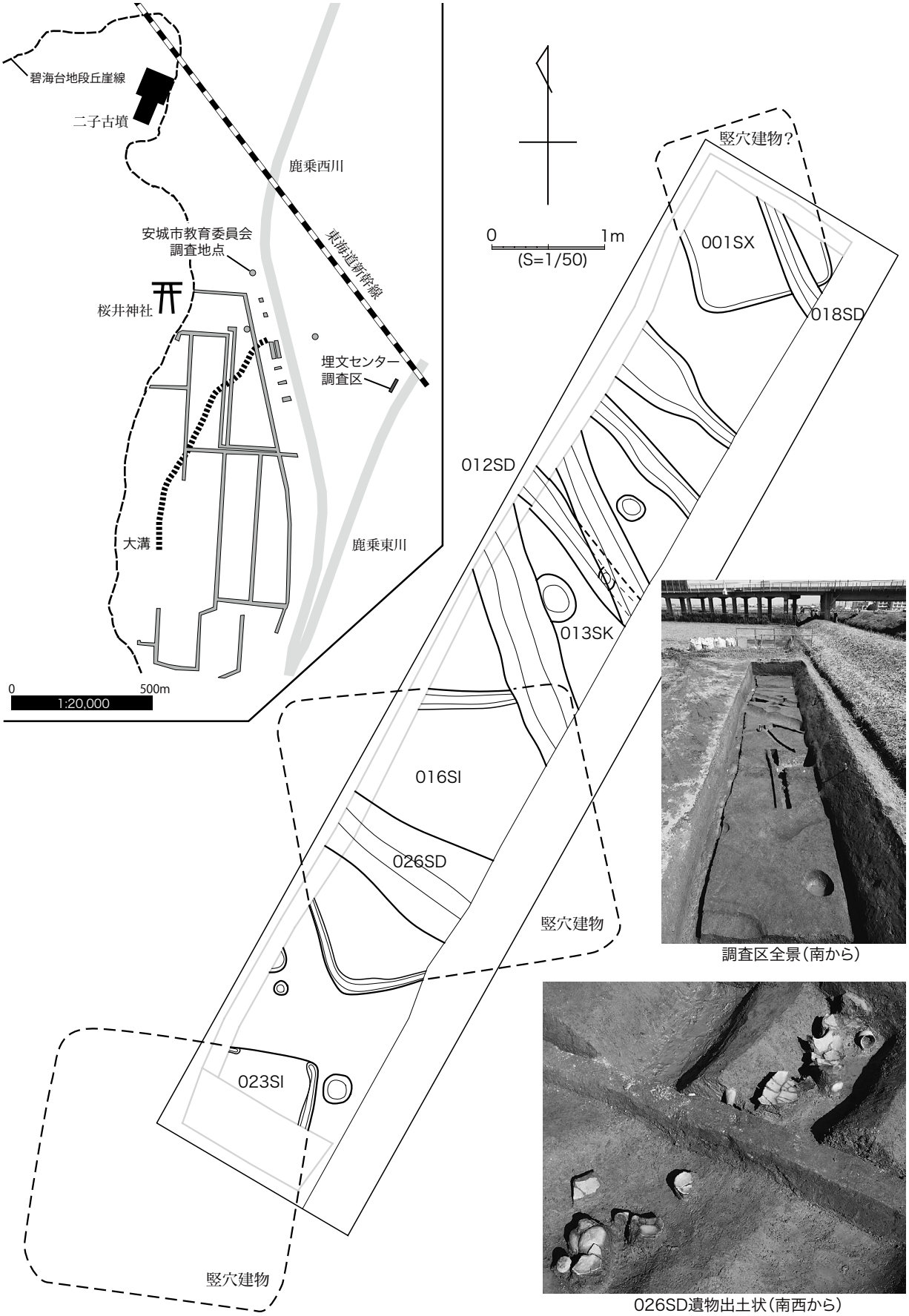
検出された主な遺構は、溝7条、竪穴建物2棟、土坑1基である。

溝026SDは北西～南東方向へ延びる幅0.8m深さ0.3mで、埋土の上層で土師器壺（小型壺）や高杯（屈折脚）が多数出土した。土師器は尾張地域の松河戸Ⅱ式にほぼ併行し、古墳時代中期前葉に位置づけられる。もうひとつの溝012SDは、ほぼ垂直に掘り込まれすぐに埋められた状態を示しており、一部に柱穴痕を推測させる深い掘り込みも認められた。従って大壁建物や布掘りの掘立柱建物を想定しておきたいが、柱穴については明瞭な痕跡ではなくまた遺物もほとんどなかったことから確定的ではない。

竪穴建物016SIは溝026SDに先行することが切り合い関係から明らかとなった。一辺約3mの方形で壁溝がほぼ全周する。所属が明確な出土遺物がないことから時期不詳であるが、今回の調査区からは弥生土器の出土がなかたことから古墳時代前期に限定される可能性が高い。調査区北端の性格不明遺構001SXは小規模だが竪穴建物の可能性も考えられる。これは灰釉陶器が出土する小溝018SDに先行する。

土坑013SKからは土師器小型壺が出土した。時期は溝026SDと同じであると考えられる。

ま　と　め　今回の発掘調査では、溝026SD出土の古墳時代中期前葉の土師器が大半を占め、その他は7世紀代の須恵器や平安時代の灰釉陶器であった。この遺物相は安城市教育委員会の発掘調査成果でも認められるが、後者ではさらに弥生時代中期から古墳時代前期の遺物も潤沢であり、木製品が多数出土する大溝や墨書土器も存在する。今回の調査区はこれに比較して集落周縁部の様相をうかがわせる。これらの調査成果との比較を通じて遺跡群の全体像を見通していく作業が今後必要となってくるであろう。（永井邦仁）



調査区全景（南から）

026SD遺物出土状（南西から）

図１　調査区全体図（1:50）